

## 株式会社 StapleBio

住 所： 熊本県熊本市中央区黒髪 2 丁目 39 番 1 号  
代 表 者： 代表取締役 CEO 谷川 清  
事 業 内 容： Staple 核酸技術に基づく医薬品等の研究開発  
H P： <https://staplebio.jp/>



### Q1: 起業のきっかけ

当社の設立には、勝田共同創業者兼取締役CSOと現在の出資元でもある製薬企業CVCの出会いが大きく関係しています。当時、私はCVC側に在籍し、日本の大学がもつ有望な研究シーズを社会実装につなげる支援をしていました。日本には世界に負けていない技術レベルがあるにも関わらず、社会実装につながらず埋もれている研究シーズがたくさんあると感じていました。そんなときに出会ったのが、後に共同創業者となる勝田助教(当時)でした。Staple核酸技術について説明を受けてとても独創的だと感じたことを覚えています。そこで、更に他社が真似できない要素を追加するべく、こちらからインキュベーションプログラム(社会実装を目的とする会社設立を視野に入れた共同研究)を提案しました。ベンチャーには、他社とは競争しない独自の土俵が必要なのです。この共同研究の成果をもとに、StapleBioを設立し、私は暫定CEOに就任しました。

### Q2: 事業戦略と知財戦略

設立前のインキュベーションプログラムの段階から、事業戦略の大枠を組み立て、並行してその事業戦略に沿った知財戦略を策定していきました。新たに出てくる研究データをもとに、毎月、特許戦略会議を行いました。会議には外部の弁理士に参画していただき、いかに特許を強くするかを目的に出願の順番や国も含めて議論しました。特許の取り方次第で、事業戦略にも関わってくるため、会社にとってどんな取り方が適しているのか、事業ゴールは何か、何がやりたいのかを明確にした上で特許を取ることが重要だと考えています。

また、当時さまざまなアドバイスを頂いた弁理士は、CVC側の製薬企業からは独立した立場の方に外部委託しました。大学と企業の共同研究においては、技術のコンタミネーション(混入)を避けることが重要で、大学の知的財産を適切に管理しつつ、製薬企業とのバランスを保つことで、大学と密に活発な議論をすることができました。この弁理士の方には、出願後もフォローいただいています。

### Q3: 組織づくりと地方の研究人材

組織と会社の風土をつくるのはヒトですので、当初は研究員についても、ある程度関係性があり、当社技術のことを理解している研究者数人を採用し、密にコミュニケーションをとりながら研究をスタートしました。沖縄に設立したウェットラボには熊本大学等からのインターンシップ生も受け入れており、学生が研究だけに没頭できるような環境も提供しています。現在、東京一極集中で地方の研究人材が都市部に流れ、地方での起業機会が減ってしまう悪循環があります。東京以外の大学生にとって、地元でも増えつつあるバイオベンチャーが就職先の選択肢の一つとなればと考えています。

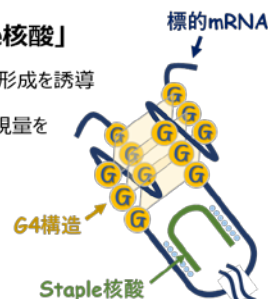
### Q4: 今後の展望

製薬企業は創薬ベンチャーのパートナーです。彼らが技術のどこに魅力を感じているか、医療現場でどういった治療薬が望まれているか、そのためにどんなデータを出していくか、出口がIPOでもM&Aでも当社がやっていくことは変わらないと考えています。ただ前提として、当社の目標は当社技術が最終的に医薬品になることですので、そのためにどちらの出口が、この技術を最も上手く活用できるか、そして社会実装を目指すときに現実的な方法であるかということが重要と考えています。海外メガファーマを含めたグローバルな視野で、技術を上手く繋げる方法を模索していきます。

## コア・テクノロジー

### 新規核酸医薬技術「Staple核酸」

- 標的遺伝子上に人工的G4構造形成を誘導
- 疾患の原因となるタンパク質の発現量を適切に制御
- Staple核酸の3つの特長
  - ① 高い標的選択性
  - ② 高い疾患汎用性
  - ③ 高い生体内安定性



## 10年後の目指す姿

StapleBioとしてのEXITを経て、成功経験をエコシステムに還元していきたい。